

## 写真を生かした記録から見る 3 歳児の姿

—— 保育者の語り合いを通じた気づきと「10 の姿」 ——

The Behavior of Three-Year-Olds Through Photographic Documentation: Awareness and the “10 competencies expected to grow by the end of early childhood” Through Kindergarten teachers Narratives.

児童学科 柳原 希未\* 山口 舞\*\* 日下部 弘美\* 請川 滋大  
Dept. of Child Studies Nozomi Yanagihara Mai Yamaguchi Hiromi Kusakabe Shigehiro Ukegawa

\*日本女子大学附属豊明幼稚園 \*\*元・日本女子大学附属豊明幼稚園

**抄 録** 本研究では、幼稚園の 3 歳児クラスにおいて「ドキュメンテーション」と呼ばれる写真を用いた記録作成を毎日行った。ドキュメンテーションを作成する過程において、当初は 1 人で作成したものを、3 歳児を担当するようになってからは 2 人の担任で行うこととなった。担任が 2 人になってからは、それぞれが 1 枚ずつドキュメンテーションを作っていたが、その後 1 人で 1 枚または 2 人で 1 枚を作る形にしていった。その結果、作業の効率が上がり、共同でドキュメンテーションを作成することにより担任同士の会話が増えることとなった。さらにそういった作業によって、今後どうするかという「NEXT」を導きやすくなった。将来的には、ドキュメンテーションのような写真を生かした記録作成を他の学年や教員に広げていくことが期待される。

**キーワード**：ドキュメンテーション、幼稚園、3 歳児、「10 の姿」、保育者の語り

**Abstract** In this study, we conducted daily photographic documentation in a kindergarten class of 3-year-olds. In the beginning, the documentation was done by a single teacher, but after taking charge of the 3-year-olds, it was done by two teachers. When there were two homeroom teachers, each of them made one documentation, but later, each made one documentation, or both of them made one. As a result, the efficiency of the work increased, and the number of conversations between the homeroom teachers increased as they worked together on the documentation. In addition, such work made it easier to determine the best course of action. In the future, it is hoped that this type of documentation, which utilizes photographs, will be expanded to other grades and teachers.

**Keywords**: Documentation, Kindergarten, Three-year-olds Children, “10 competencies”, Teachers Narratives

### 【はじめに】(日下部)

保育現場では「記録」することが求められ、目的に応じて、さらに時代の流れによる影響も受け、これまで「エピソード記録」や「マップ型記録」等が誕生してきた。河邊貴子が提唱する「保育マップ

型記録」は、医療現場で使用される記録の視点「SOAP」(図 1)を用い、翌日の保育を構想していくことを主眼としている。子どもたちの関係性が徐々に深まり群れて遊ぶようになってくると、空間俯瞰的に記録することが容易になり、本園でも永年、年齢に応じてこの記録法を活用することが多かった。

S：主体者である子どもの遊びの姿の把握  
 O：保育者の読み取り  
 A：保育者の願い  
 P：願いに基づく環境の構成

図 1 河邊（2021）による保育型 SOAP の解釈

しかし近年、「ドキュメンテーション」「ポートフォリオ」「ラーニングストーリー」など写真を用いた記録が注目されるようになり、本園でも 2016 年度より、「日の記録として」、つまり「自己の保育の振り返りとして」、ドキュメンテーションを導入し始めた。佐伯胖が「私たちは『写真』の中にドラマ（ナラティブ）を観る」とし、写真の中の多様な意味を読み取り真のドラマを追究する必要性を問うているように、写真の力は偉大だった。写真と文章で綴っていく過程で、河邊が主張している遊び理解の視点としての「SOAP」を記述することを意識し、完成後学年の担任間でこれを元に話し合い、翌日の保育を皆で共有していくようにした。この語り合いでは、担任では気づけなかった点が明確になったり新たな名案が提示されたりすることも多く、環境構成について再考する場となった。さらに「O:保育者の読み取り」では育ちを意識する余り、子どもたちの感じている世界を自分に都合の良い思い込みで捉えがちであったが、個々を多角的に観て子ども理解を深めることもできた。このような日々の積み重ねから誕生したのが、翌日の保育構想としての「NEXT」という視点である。これについては後ほど述べる。

では本園で取り組んでいる記録の種類について紹介する。撮影した写真をタグ付けすることで、「日の記録」を始め「個人記録」にも代用し、その他様々な記録に活用している。これにより作業の効率化を図っている（図 2 参照）。

本稿では、このような日常的な試みから見えてきたことを、3 歳児の具体的な事例を通して考察する。「子どもたちの遊びの質・保育の質」を保障していく上で保育記録は不可欠であるが、記録を書くことが目的ではなく、これを元に語り合う時間を十分確保すること、そして皆で「保育の楽しさ」を感じつつ保育の質について問い続けていくことが重要であることを、実践を通して理解できたことは大きい。

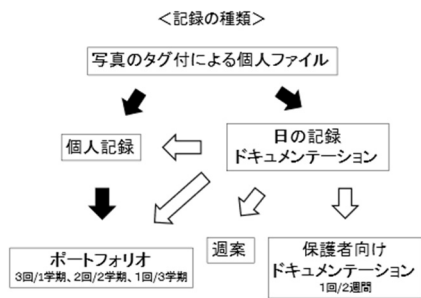


図 2 記録の種類

【記録を通して生まれる保育者間の語り合い】  
 （山口）

対象：2018 年 4 月 入園

3 歳児クラス 3 クラス

各クラス（女児 20 名・男児 8 名）

2 人担任制

1 学期のみ補助教諭 1 名

＜日の記録の作成＞

・日の記録としてのドキュメンテーション

日の記録として、1 日につき A4 で 1 枚ドキュメンテーションを作成している。エピソードのみならず、子どもの育ち、今後の展開の予想、明日の援助を省察するようにしている。それらの過程の中で、自分の思考が整理されるとともに、子どもの興味に気づいたり、遊びの連続性も見えたりしていった。常に教育課程や後ほど紹介する事例をきっかけに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にも立ち返るよう心掛けていった。

・2 人担任で作成する日の記録

2016 年度より日の記録としてのドキュメンテーションを作り始めて以降、初めて 2 人担任となった。そのため、1 人ではなく 2 人で作るドキュメンテーションの形を探っていくこととなった。

初めは A4 で 1 人 1 枚ずつ作成していたが、時間が掛かってしまった。時間を短縮できるよう、担任間で日の振り返りを話し合った後、1 人が作成を行うようにした。もしくは 1 枚の中でそれぞれがかかわった部分を書き、2 人で 1 枚を作成するようになった。このような方法で、記録を作りながらも他の仕事が進めていけるようにしていった。

・日の記録の活用

日の記録で作成したドキュメンテーションの内容は、週案、保護者向けの掲示としてのドキュメン

ーション、個人記録、個人のポートフォリオにも生かせる部分があれば活用していくようにした。

### <日の記録から生まれる語り合い>

#### ・保育者間での情報共有ツール

日の記録により、クラスの担任間での語り合いが増えた。また、クラスで作成した記録は翌日の保育が始まる前に、学年の担任間でも見合うようにした。クラスの担任間（2人）だけでなく、学年の担任間や補助教諭（7人）でも共有して、感じたことや気づいたことを伝え合うようにしていった。

#### ・翌日の保育に生かす視点

保育者間の話し合いでは、情報を共有しながら育ちに着目し、翌日の保育に生かせることを中心に行うよう心掛けた。そのため他者にも伝わりやすいように、文章が多すぎたり、その日見聞きしたこと全てを載せたりするのではなく、整理して作成するようにしていった。また、遊びの様子と育ちを書いた上で、翌日以降の保育をどのように展開しようと考えているのかという「NEXT」をわかりやすく括りだすようにした。記録を見合う中で具体的な場の作り方や教材の準備など、環境構成を提案し合ったり、一人では気づかなかったような視点や発想が生まれたりすることにつながっていったと感じられる。

実際の日の記録では、以下のように保育者間で話し合いながら、翌日の保育につながるようになっていった。記録の一部を抜粋し、事例を紹介する。

### <事例1>

#### プリンセスごっこ **クラスの姿**

（3歳児クラス11月）

プリンセスごっこを楽しみ始める子どもたちの姿が見られた。1学期に見られたプリンセスごっこでは、お面ベルトに紙で冠の形を描いて作っていたが、2学期はまた違う経験を願いながら、作りたいティアラのイメージをよく聞いて、子どもの思いに寄り添いながら作ることにした。そのため、教材室に行き、様々な素材の中から使いたいものを選びに行くことにした。子どもたちが選んだのは、紙ではなくキラキラしたモールだった。またA児が髪の毛もつけたいということで、スズランテープの髪付きティアラが流行り、クラスの枠を越えて遊びが広がっていった。

このような姿から、自分たちで遊びに必要なもの

2018年11月12日(月) プリンセスごっこ



1学期6月紙のティアラ

プリンセスごっこを始めた子ども達。ステッキ作りの後、ティアラも必要ということで、教材室に材料を選びに行くけど、モールが良いとのこと。A児が髪の毛もつけたいということで、髪の毛付きのティアラ作りが流行る。午前中に見に来ていた隣のクラスの子とも午後と一緒に遊ぶ。



自分達で遊びに必要なものを作っている。様々な素材の中から選んで、新しい素材の特性にも気づき始めている。友だちの様子を見ながら、自分で作ろうとしているが、スズランテープの三つ編みは難しく、保育者の手が必要。廊下に場を設けたことで他クラスとも交流しながら遊んでいる。



・モールはねじると繋がることを知る  
・自分の頭の大きさに合わせて作る

子ども達の作りたいイメージを聞きながら、必要な材料と一緒に考えていく。明日も廊下にお城の場を設けることで、クラスの枠を越えた関わりを楽しんでいく。三つ編みは難しいので保育者が手を貸していくが、自分でやろうとしている姿を支えられるようにしていく。

**NEXT**

図3 日の記録（プリンセスごっこ クラスの姿）

を考えて様々な素材の中から選んでいたり、モールという新しい素材に触れたりすることでの気づきなど、子どもの育ちも読み取るようになっていった。モールは初め、セロハンテープでとめようとする子どももいたが、モールに触れながら、その特性に気づいていった。ねじるとつながること、色々な形になること、自分の頭の大きさに合わせることもできるので、子ども同士で合わせ合う姿も見られた。スズランテープの髪の毛は三つ編みにしたいというA児の強い希望があった。三つ編みは3歳児には難しいので、保育者が作っていった。しかし保育者だけで作ってもと思い、一人ひとり手を添えながら作っていった。

今後のことを考えていくと、やはり三つ編みは3歳児には難しく保育者の手が必要なため、スズランテープをそのままつけたり、ねじってつけたりしてはどうだろうかとも思った。しかし、他クラスの担任の子どもに寄り添う姿や子どもたちのあくまで三つ編みにこだわっていた姿を思い返し、支えていくことにした。また、隣のクラスの子ともたちも興味をもっていただけ、学年でも話し合いながら廊下にお城の場を残しておくことにした。

<事例2>

プリンセスごっこ (個の姿) ~B 児と三つ編み~

翌日も保育者が子どもたちの三つ編みを作っていると、B 児が三つ編みを得意なことがわかった。B 児は皆と一緒にやる活動が苦手なことで、クラスの活動ではなかなかうまく振る舞うことのできない子どもである。しかし作ることが好きで飲み込みも早く器用。

2018年11月13日(火) B児と三つ編み

B児は三つ編みが上手なので、保育者に作ってほしいと言ってくる子どもにB児にお願いするよう促していた。保育者からもお願いしたり、作ってあげた友だちからお礼を言われると、照れくさそうに「どういたしまして」とこたえている。



保育者や友だちに自分が作るものを求められる喜びを感じている。

好きなことや得意なことを通して、自然と友だちと共に遊ぶ楽しさが感じられるように、今後も機会を見つけていきたい。

NEXT

図4 日の記録 (プリンセスごっこ 個の姿①)

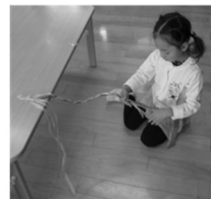
そんなB児が活躍しながら友だちの三つ編みを一緒に作ってくれた。保育者や友だちがお願いすると快く引き受け、お礼を言われると照れくさそうに「どういたしまして」というB児のかわいらしい姿が見られた。また3本のスズランテープを同じ長さにした方がいいことに気づいて、図4のように同じ位置に置いて伸ばして切るなど、よく考えて工夫しながら作っていた。友だちに自分が作るものを求められる喜びを感じながら、好きなことや得意なことを通して友だちとの自然なかかわりにつながる機会を今後も見つけていきたいと思った。

<事例3>~C 児と三つ編み~

次にその様子から刺激を受けたC児。初めはB児に三つ編みを作ってもらったC児だったが、しばらくすると自分でも挑戦してみたくなったようだ。B児が三つ編みを作るようになって10日程経ってからのことだった。C児の溜め込んでいた思い、B児の様子からのつながりも日の記録から見えてきた。C児は何日も何日もかけて三つ編みができるようになるまで根気よく繰り返し、自分の納得がいくまで何度も作り直していた。その様子を保育者も根気よく見守ることにした。

2018年11月26日(月) C児と三つ編み

B児に三つ編みを作ってもらっていたC児だったが、自分でも挑戦してみたくなった様子。保育者と一緒に繰り返し行うがなかなか難しい。



友だちの様子から刺激を受けて、何度も繰り返し粘り強く挑戦している。

保育者があまり手を貸し過ぎずに、C児が自分で納得いくまで挑戦する姿を見守り、出来上がった時の達成感が感じられるように支えていく。

NEXT

図5 日の記録 (プリンセスごっこ 個の姿②)

そして出来上がった時のC児は誇らしげな表情で、何をするにもそのティアラをつけて大切にしていた。図6の写真は、床まで届く長さの三つ編みをティアラにつけて、満足そうな様子のC児である。



図6 日の記録 (プリンセスごっこ 個の姿③)

【考察】

事例に挙げたように日の記録の中では、遊び全体を取り上げたり、B児・C児のように、時にはその遊びの中の個の姿にも注目したりしてきた。4・5歳児クラスで日の記録を作成していた時よりも、やはり3歳児の方が個の姿を取り上げることが多かった。

日の記録を作成するにあたり、保育中の出来事を保育後に改めて振り返り、またそれを他の保育者と共有して話し合う中で、1人では気づけなかったことに気づけたり、1人では出会えなかった子どもの姿に出会えたりすることができた。

プリンセスごっこにおける効果の具体例を挙げる。まずは三つ編みに関して、担任は3歳児には三つ編みが難しいと感じてしまっていたが、他クラスの担

任ができる限り子どもが1人でできる姿を支えていることを知り、私も子どもたちが自分で頑張っている姿を大切にしていきたいと感じたことが、その後の事例へとつながっていった。また、B児の姿を学年間で共有することで、他クラスの子どももB児に三つ編みを頼みにくることがあり、B児の友だちとの関わりの幅は一層広がった。C児が頑張る姿も共有したことで、他クラスの担任もその姿を認めて励ましに来てくれることもあった。クラスの枠を越えて保育者や子どもとのかかわりが増えることは、その子どもの育ちにとって大変有意義である。このように、日の記録を通した保育者間の対話は、自分の思い込みに気づかされたり、子どもたちのより良い育ちにつながる経験を与えてくれたりすると、実感している。

【記録や話し合いを通しての気づき  
～「10の姿」の芽生え～】(柳原)

3歳児9月、A児が型抜きに繰り返し取り組む姿を日の記録や学年の話し合いで共有し、見守っていった。3歳児なりに試行錯誤する姿を保護者にも

伝えたいと考え、図7のドキュメンテーションを作成した。

保護者向けドキュメンテーションは、子どもたちの様子や今の育ちを保護者に伝える目的で、A3に印刷し玄関に掲示をしている。今回は遊びが続き様子、A児の葛藤や気づき、変化を保護者にわかりやすく伝えるにはどうしたらよいか、日の記録を元に話し合いを重ね、1枚にまとめていった。

<事例4>

型抜きに挑戦(3歳児クラス9月)

新しい型抜きに興味津々のA児。乾いた砂を入れるとさらさらと零れ落ちてしまう。入れては零れ、落ち崩れることを繰り返していた。

翌日は、前日の雨で砂が湿っていたことが功を奏し、砂をきゅきゅっと力強く詰めていくときれいに型抜きができた。それを伝えようと保育者を呼びに来ていた。その後何日も続けて挑戦する中で、自分なりに力を入れて砂を詰めていくとよいということに気づいていった。「こうやってやるんだよ」と友だちにコツを伝えようとしていた。



図7 ドキュメンテーション (保護者向け)

## 【考察】

日の記録を元に、A児の事例を学年で話し合いを重ねるうちに、このような姿は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(通称：10の姿)につながるのではないかという気づきにいたった。実際、10の姿に置き換えて考えてみると、自ら動き出しモノと対話するA児の姿からは「自立心」、何度も砂に触れ遊ぶ中でその特性を少しずつ感じている姿からは「自然とのかかわり」を感じた。何度もやってみるうちに力強く押し詰めた時にうまくいくことに気づき、繰り返すうちに確信となっていく。その姿は「思考力の芽生え」につながっていると考えた。また友だちに言葉で伝えよう(「言葉による伝え合い」とし、遊びが広がっていく。このように、この事例を通して3歳児から10の姿の芽生えが始まっているのではないかと考えた。実際に保育者が意識を向けることで、その姿の芽生えに出会う機会が増えていった。このことをきっかけに、その後の子どもの姿の読み取りや、保育者のかかわりが変わっていった。

## &lt;事例5&gt;

## 砂場で山作り(3歳児クラス11月)

事例5では砂場で山作りをして遊ぶ6日間の記録から、10の姿の芽生えについて考察したい。

**1日目** B児たちが山作りを始めた。C児が「水をかけた方が硬くなる」と言ったことで、水をかけながら山を作り始める。

子どもたちだけでも目標がわかりやすく力を合わせて取り組む姿が見られた。明日まで山は残し、様子を見ていく。



図8 山作り

**2日目** 翌日は水をかけ、叩いて固める中で、D児が足で踏みつけ崩れる場面もあった。B児が怒るが、固める為だとわかると一緒に作り進める。

昨日より固まり、高くなる様子が感じられたようだ。水をかけるだけでなく、叩いて固めることで高さが出てきた。



図9 叩いて固める

**3日目** 年長児が硬くなる方法として白砂をけかけて来た。落ち葉で飾り付けや水で模様付けを始める。水で模様を描くがしばらくすると消えてしまうことに気づき、途中でやめる姿も見られた。

他学年の刺激を受け、明日どう変わるか見ていく。



図10 山を飾る

**4日目** 白砂を自分たちでもかけ始め、水と交互にかけ固めていた。声を掛け合い、水を運ぶ。バケツがなく、その中で一番大きいと思われる容器を探し運んでいた。隣で年中組が小さな山にトンネルを開けているのを見て、トンネル作りが始まった。

白砂を取り入れ、昨日より固まった感覚がもてた

様子。手分けしながら作り進めている。



図 11 トンネル作り

**5 日目** 3 方向から掘り進め開通する。穴を更に大きくしようとする子ども、頑丈にしようと上から固める子どもの姿が見られた。

壊れてしまわないかはらはしながらも、子どもたちのやってみたいという気持ちを大切にしていた。

**6 日目** トンネルが崩れてしまう。原因を考える子どもたち。前回の経験から土台を丈夫にしようと、下から踏み固める姿が見られた。

#### 【考察】

事例 5 にみる 10 の姿の芽生えについて、10 の姿の視点をもとに考察した。

#### ・自立心

事例 5 では、自分で考え行動する姿が見られている。1 学期は、初めての園生活で安心して過ごし、自分が認められる経験をしていく中で、好きな遊びを見つけていた。その経験をもとに 2 学期には、友だちの刺激を受け参加している子どもも出てきた。その中で、自分が山を作り、どのようなことをしたらよいか、役割や方法などを考え、取り組む姿も見られた。

中には近くで他のことをしながら、その様子を見ている子どももいた。保育者が声をかけても拒み、頑なだったので、気に掛け見守っていった。時間は要したが、自分のタイミングで参加し始め、嬉しそうに一緒に山作りをする姿が見られている。このように、心が動き、自分で行動することが自立心へと

つながっていると考える。

#### ・自然とのかかわり

砂と触れ合う中で、その感触を楽しむだけではなく、水や砂の性質も感じながら遊んでいた。山が硬くなる様子、水が吸い込まれる様子や乾く様子を、遊びが続く中で体感している。実際に見ることでその不思議さを感じ楽しむ姿が見られた。山作りとして、硬く高く積むためには、どのように砂や水とかわかるとよいか、自然物と向き合い、経験を重ねる中で知っていった。

#### ・思考力の芽生え

高くするにはどうしたらよいか、初めはひたすらに砂をかけるだけであったが、その途中で様々な材料や方法を友だちや異年齢のかかわりを通して、学び実践していった。新たな方法を取り入れたことで、硬くなったことを体感しながら、子どもたちなりに次へ生かそうと伝え合う姿も見られた。

最後に崩れた際にも、どうして崩れたのか自分たちなりに原因や新たに作るにあたってどのようにしたらよいかを考え、やってみようとしていた。子どもたちなりに思考し、試し、また考えるサイクルが遊びの中でも見られた。

#### ・言葉による伝え合い

メンバーは入れ替わるが、言葉で伝え合うことで、遊びや様々な方法が続いていった。3 歳児ということで、言葉よりも行動が先にでてしまうことや、うまく説明できない姿も見られ、急に水をかける、足で踏む行為が、初めは誤解を生み、トラブルにも発展しかねない状況であった。保育者もその思いを汲みながら、山を高くするためにやっていることを、伝え合えるようにすると、お互いに理解が深まり、共に遊びを進めようとしていた。このようにうまく伝えられない時には保育者が促していったが、話を聞き相手を受け入れることで、遊びが続いていき、協同性にもつながっていった。

山作りを自ら始め、一生懸命に取り組むあまり怒っていることの多かった B 児が、山が崩れた時に「仕方ないよ」とつぶやいていた。共に作る過程を通して、友だちも自分と同じように残念に思っていることを感じ取り、発した言葉ではないかと思われる。そこで育まれた気持ちは、次の協同性にもつな

がっていると感じた。

#### ・協同性

山を高くするという共通の目的が明確であったことや、実際に高くなってきた実感が伴い、一緒に行く意欲へと結びついた。また、場を残しておくことで、様々な子どもが加わっていた。

1 学期の経験を生かし、水を運んだり、山を固めたりと役割分担し始めていた。その場の雰囲気を感じ、自然と役割を決める子どもや声をかけて手伝いを求める子どもも見られた。大きな山を作る為に、人手の必要性も感じ、人を集めようとする動きもあり、初めよりも大きなまとまりとなっていた。

#### ・数量への関心・感覚

今までの経験から、水を運ぶために、バケツやジョウロを探していたが、砂場では多くの子どもが遊んでおり、道具がないこともあった。その時に小さなカップで運んでいる友だちを見て、それよりも大きい漏斗を選んだ B 児。穴は手で押さえながら水を運んでいた。更に両手で運ぶことで水の量を増やそうとしていた。子どもたちの中で大きさを比べ、より多くの水を運ぶ方法を見出していた。



図 12 漏斗で運ぶ

#### ・豊かな感性と表現

落ち葉で飾ったり、丸い円で跡を付け模様にした、高くするだけではなく、きれいに見せたいということから飾り付けをしていた。落ち葉の飾りも下は大きな葉を、上部は小さくちぎった葉を飾る等、デザインを考え作ろうとしていた。

水で模様を付ける中で、その面白さや乾いて模様が見えなくなる、そのはかなさも感じていた。常にある美しさだけではなく、その瞬間に感じられるものがあるということにも気づかされた。

#### <3 歳児の姿と保育者のかかわりについて>

10 の姿の芽生えが上記の事例からも見られた。またこれらの要素は互いに影響しつつ、つながっていることにも改めて気づいた。

事例 4 をきっかけに保育者は子どもたちの気づきや試行錯誤を大切にしたいと思い、待つことを心掛けた。すると面白い発見や子どもなりに考えている姿に出会った。子どもたちのやってみようとする気持ち、こうしたらできるかもしれないという気持ちを大切に、うまくいかない時には話を聞きながら、子どもからのアイデアを認めていくように心掛けていった。

3 歳児は言葉でうまく伝えられない分、その姿から保育者が見とりながら、うまくいかないことが続いた際には、気持ちを支えることが必要である。どこまで待つのかは時期や個々に応じて異なり難しいが、そのような保育者のかかわりも子どもたちの育ちに必要なことであると感じた。

子どもの姿を振り返る中で、様々な 10 の姿の芽生えと出会った。5 歳児になってから「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を意識するのではなく 3 歳児からその姿に気づき、保育をしていきたいと考える。このような気づきにいたったのも、教員間の語り合いを大切にしてきたからである。日々の記録を元に対話することで、皆で個々の育ちを共有し、一人ひとりを温かいまなざしで見守っていった。このような語り合いの機会を今後も大切にしていきたい。

#### 【全体考察】(請川)

本研究では、3 歳児クラスにおける記録を、写真を効果的に活用したドキュメンテーション形式に変更したことで、保育者間の語りが増え、より多角的な幼児理解ができるようになったことを示した。記録の活用については、改訂前の幼稚園教育要領解説においても触れられており、園内研修で記録を活用して振り返りを行うことや、他の教師と記録を見合い話し合いを進めるなど指摘されている(文部科学省, 2008)。本研究では記録を用いた振り返りや話



し合いが報告されているが、これまでの要領解説では写真の活用については触れられてこなかったもので、その点は新しい取り組みと言えよう。今回、写真を有効に用いた記録作成を通して保育者間の語り合いが増えたことを考えると、写真を選んだり、写真を通してエピソードを振り返ることそのものが保育者間の語り合いのきっかけになっていたことが分かる。

さらに、写真の活用については現行の要領解説中に、保護者等に対して「写真等で活動の様子を掲示して分かりやすく伝えたりする」という記載がある。これは本論文の図7がそれに該当する。写真を使った記録が保育者間の語り合い、そして保護者へ保育内容を伝える役割を持っていることが分かる。加えて、子どもの遊びそのものにも影響を与えることは想像に難くない。請川ら（2016）に示されているように、保育者が作成したドキュメンテーションが他の子どもたちの遊びや活動を知らせる役割を持ち、そのことがさらなる遊びの展開に影響していることは保育実践例においても明らかである。

最後に今後の展望について触れておく。1つはドキュメンテーションのような新たな記録作成に取り組むためには、それらを作成するための時間の確保が欠かせないということだ。これまでの仕事にプラスだけでは、保育者がより多忙になり疲弊してしまうので、仕事全体を見直し時間を確保すること

をしていかないといけない。2つ目は、このような前向きな取り組みを園全体でどう共有していくかということである。せっかく始めたものも、一部の保育者の取り組みだけにしておいてはどこかで終わりが生じてしまう。記録を作成するための時間（ノンコンタクト・タイム）の確保をしつつ、園全体の取り組みにしていってもらいたい。

#### 【引用文献】

- ・ 請川滋大・高橋健介・相馬靖明（編）：保育におけるドキュメンテーションの活用，ななみ書房，（2016）
- ・ 大豆生田啓友：「対話」から生まれる乳幼児の学びの物語，学研，107（2016）
- ・ 河邊貴子：遊び理解を次の保育につなげる記録—「保育マップ型記録」と「SOAP」の有用性，発達，167，ミネルヴァ書房，20-21（2021）
- ・ 文部科学省（編）：幼稚園教育要領解説，フレール館，（2008）
- ・ 文部科学省（編）：幼稚園教育要領解説，フレール館，（2018）

#### 【参考文献】

- ・ 無藤隆：幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿，東洋館出版社，（2018）

